



屋代本平家物語の研究の可能性―頼朝中心の編纂意識と現存本の成立背景から

中桐, ゆかり

(Citation)

国文学研究ノート, 53:32-48

(Issue Date)

2014-10-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81008688>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008688>



屋代本平家物語の研究の可能性

——頼朝中心の編纂意識と現存本の成立背景から

中桐ゆかり

一、はじめに

本論は現存屋代本平家物語の編纂意識と成立背景を探ることを試みる。屋代本は語り本系の一つとされ、灌頂巻を特立せず平家嫡流六代の斬首で終える「断絶平家型」であること、編年体的な記事配列で叙述が簡略であることが特徴に挙げられる。また、巻四、九は欠巻で、別冊として屋代本巻第一～十二に含まれない『平家物語』内の七つの記事が抄出された「抽書」⁽¹⁾、源氏重代の刀剣である鬚切・膝丸の継承を宝剣と重ね合わせて語る「剣巻」を持つ。屋代本の研究史は麻原美子氏⁽²⁾、千明守氏⁽³⁾がまとめられ、諸本系統論や性格論等、様々な観点から研究がされてきたことが分かるが、その大きな流れには古態⁽⁴⁾という点が深くかかわっている。しかし、かつて山田孝雄氏⁽⁵⁾によって応永年間（一三九四～一四二七）とされていた書写年代が、吉田永弘氏⁽⁶⁾による語法の調査から、室町時代後期の十六世紀中～後半の可能性が出てきた。また、千明守氏⁽⁶⁾により「小督」の挿入位置等からも、屋代本の後出性が指摘されている。

このように、古態性が揺らぐなかで、屋代本の最も大きな研究課題は、所謂語り本系、読み本系といった諸本群全体における屋代本の位相を示すことにある。それが『平家物語』諸本の成立過程という重大な課題につながると考えられ、各章段の本文形成を精査することが求められている。以上の研究は麻原氏が指摘されるように、現存屋代本を通して「原屋代本」なるものを考察している。

確かに、本文に古態性を残すことは諸氏の御研究からも首肯できる部分はある。しかし、現存屋代本は別冊の「抽書」、「剣巻」に加えて、書誌的観点からも特異性が指摘される。よって、古態如何に拘らず、「抽書」、「剣巻」を含めた現存屋代本の構成・編纂意図や、そこにあり得る文化的背景を考えて、改めて位置づけを探る必要があるのではないか。今回はその一試論として、屋代本本編（巻第一～十二を指す）の叙述や編纂意識を確認し、現存屋代本が書写されたとされる時期までの源氏に対する社会的意識との関連性を考察する。

二、屋代本本編における頼朝重視の編纂意識

屋代本本編の編纂意識については諸氏の御研究があるが、今回は松尾葦江氏、原田敦史氏の御見解を自身の考察の端緒として示す。松尾氏は屋代本巻第十「藤戸」⁽⁸⁾、「首渡」で合理的な、巻第十一「副将被斬」で淡々とした説明がなされることにより、仏教色の強い覚一本に対して、物事を彼岸ではなく此岸で解決しようとする傾向があると指摘する⁽⁹⁾。また、巻第十二では諸本と異なり、頼朝がかかわる「宗盛被斬」、「重衡被斬」を冒頭に置くこと、義経が宗盛父子を連れて鎌倉から上洛する折に、尾張国野間にある父義朝の墓に参ることから、簡略ながらも源氏の復讐譚として構成され、断絶平氏で全編を結ぶために記述を選択・類別したとする。原田氏は、屋代本に見られる「悪行」の対象が仏法ではなく、王法、それも治承三年の政変に関わる「悪行」に比重を置いており、平家滅亡の「因果観的構想」が意識的に形成されていることを指摘した。

このように、屋代本には仏教色の薄さや源氏への意識が端々に見られている。頼朝や東国を重視した叙述が延慶本や『源平闘諍録』に見られることは先行研究で明らかになっているが、そういった諸本とは異なる形で屋代本が頼朝を意識した叙述をすることを、両氏の御見解をもとに他の記述等で確認する。

(一) 巻第十二の末尾の記事配列

これは、原田氏⁽¹²⁾の論に依拠する所が大きい。氏は延慶本第六末(巻第十二)の末尾の平家残党記事が、家長・盛嗣・景清↓知忠↓忠房・宗実↓宗親(存命)↓貞能(存命)↓六代として、追討される者が、平家侍(家長ら)↓平家公達(知忠)↓小松家公達(忠房・宗実)↓小松家嫡流(六代)と整っているとする。一見余剰とみえる宗親の記事は、直前の宗実が出家後に殺されたことに関係づけられ、宗親は宗盛の養子でありながら出家して平家断絶の概念から度外視されるという文脈に位置する。また、平家の家人である貞能は延慶本では重要な役割を与えられており、観音利生による存命は六代助命譚における観音利益とつながる。この二つの存命記事により、嫡流六代の死を際立たせる要素になっていると指摘する。

整然とした平家残党追討記事群の後に頼朝礼賛記事を置くという点では延慶本には明確な平家断絶と源氏の台頭が示されていると考えられる。では、これは屋代本にあてはまらないのか。屋代本の末尾は知忠↓忠房・宗実↓盛嗣・景清↓六代というように、平家公達↓小松家公達↓平家侍↓小松家嫡流となっている。小松家公達―嫡流間に簡略ながらも盛嗣・景清の記事を挟んではいるが、覚一本や四部合戦状本(以下、四部本)が後白河法皇の崩御記事を途中に挿入するのに比べ、記事選別自体は平家断絶を明確に意識しているといえる。また、「剣巻」が付されるということを踏まえると、現存屋代本としては平家断絶と

源氏台頭という構成がなされていると考えられないだろうか。

(二)頼朝の性格付け

配列のみでは頼朝の重視を断定しがたいが、その他、屋代本の独自文における頼朝の叙述に着目して引き続き検討する。原田氏は屋代本における頼朝の存在は希薄であるとするが、それは延慶本との比較により考えられることであり、簡単に首肯できない部分もある。巻第十二を中心に諸本と差異の見られる頼朝に関する叙述をいくつか抜き出して考察を加えたい。

①頼朝の明確な範頼誅殺（巻第十二「関東不審間義顕落都事」）

まずは、義経の追討に際する頼朝と範頼との対話の場面を確認する。頼朝が義経追討を決め、弟の範頼に「わたのも、九郎がまねし給ふなよ」〈覚〉と牽制し、範頼は謀反の意志がない旨を起請文に記すも誅せられるという展開であり、延慶本・長門本も同様である。四部本は、「此事梶原議言云」として、義経と同様に景時の讒言を理由に挙げる。この場面における屋代本の特異性は、範頼を誅殺する理由が明確である点だ。屋代本では、

源二位（頼朝）大ニ驚キ、舍弟三河守（範頼）ヲ呼テ、「御辺、九郎力討手大將ニ上リ給ヘ」ト有ケレハ、三川守辞シ申サル。鎌倉殿大ニ怒テ、「サテハ御辺モ、九郎ト同心コサンナレ。今日ヨリシテハ、頼朝ニ兄弟ノ儀有ヘカラス。鎌倉

中ニモ不可御坐」ト宣イケレハ

（括弧、傍線——引用者注、以下同）

と、範頼が義経追討を「辞シ申サル」ことに「大ニ怒テ」、起請文を受け入れないという流れになっている。諸本では頼朝が警戒ゆえに弟である範頼さえも有無を言わせず誅殺する無慈悲な性格であるが、屋代本は展開が自然で諸本とは異なる性格付けがなされているといえる。

②頼朝の朝廷より強い発言権

（巻第十二「源二位頼朝日本国惣大将惣地頭被補事」）

次に、義経に頼朝追討の院宣を出したことに抗議し、義経追討の院宣とともに守護・地頭の設置権も得る場面を見る。頼朝の要求に対して覚一本は、

「是は過分の申状なり」と法皇仰なりけれ共、公卿僉儀あて、「頼朝卿の申さるゝ所、道理なかばなり」とて、御ゆるされありけるとかや。

と、法皇は渋りつつも公卿僉議で要求を認める。延慶本でも「難有御許容トハ思食セドモ、源二位ノ所被申、難去被思食ケレバ、御免有ケルニヤ」と朝廷側から許しを出している。

しかし、屋代本では、

「……源二位ノ申状過分也」ト、君毛臣毛被仰シカ共、源二位重テ再三被申ケレハ、文治元年十一月廿日、源二位頼朝卿ヲ、日本ノ大将兼惣地頭ニ被補。未先例モナキ恩賞也。

と、頼朝の強い意向により権利を得ている。⁽¹⁴⁾ 一見「未先例モナキ恩賞也」という最後の文言は批判とも読める。だが、その後続く、頼朝の要求を奏聞した吉田大納言が「直斗人」として高評価されていることを踏まえると、頼朝の奏上を完全に非難する意識はないと考えられる。よって、頼朝が院、朝廷よりも強い発言権を持ち、さらに権威を得る人物として描かれているといえる。

③頼朝の「はかりこと」の欠如

(巻第十二「丹後侍従忠房出降人被誅湯浅被助事」)
先述でも触れた追討記事の一つである忠房(重盛男)の追討に関する内容を確認する。忠房は屋島合戦後に紀伊国の湯浅七郎宗光(延・覚は宗重)の許に潜伏していた。覚一本で頼朝は「頼朝を流罪に申なだめられしは、ひとへにかの内府(重盛)の芳恩なり」と述べ、小松家公達を助けるといふ言葉を信じて名乗り出た忠房を斬首する「はかりこと」を行う。延慶本でも同様の言葉を聞いて鎌倉に降った忠房は頼朝と対面後、上洛する折に「タバカリテ切テケリ」として、騙され斬首される。

しかし、この恩を忘れて斬首するという卑劣とも取れる行為を屋代本では語らない。忠房自身が「サレハトテ忠房故ニ、各ノ身ヲ空ク成シ奉ン事ハ痛シケレハ、只我ヲ都ヘ具テ上レ。降人ニ成テ切レント思ソ」と述べ、「余ニ宣フ間、不及力」ために降人となるというように、自らの意思で降人となる。それに

対して、頼朝も単に「別ノ子細有マシ。急キ奉切レ」と命じる。ここで頼朝は諸本に見られる忘恩者という印象を与えない。

④頼朝に対する尊敬表現

以上では頼朝の行動の相違を見たが、続いて会話表現に着目したい。屋代本では諸本と異なる敬語表現の使用が、頼朝と平家一門との対話に見られる。そのときの表現を屋代本、覚一本、延慶本で対比する。

●頼朝と重衡(巻第十「同重衡頼朝対面以後狩野介預事」)

〈屋〉兵衛佐(頼朝)、三位中将(重衡)ニ対面シ給テ、……ト宣ヘハ、三位中将ノ給ケルハ、

〈覚〉兵衛佐いそき見参して申されけるは、……と申されければ、三位中将のたまひけるは、(「千手前」)

〈延〉鎌倉殿、比企ノ藤四郎能員ヲ御使ニテ被申ケルハ、……ト被申ケレバ、三位中将是ヲ聞給テ涙ヲ拭ヒ、……ト宣ケル (第五末「八」)

●頼朝と頼盛(巻第十「池大納言頼盛関東下向頼朝対面事」)

〈屋〉兵衛佐、大納言ニ対面シ給テ、「ナト宗清ハ参リ候ハヌヤ覽」ト宣ヘハ、(頼盛)「宗清ハ今度労事候テ、下候ハス」ト宣ヘハ、

〈覚〉兵衛佐いそき見参して、まつ、「宗清は御共して候か」と申されければ、(頼盛)「折ふし劣はる事候て、くたり候はす」との給ヘは、(「三日平氏」)

〈延〉兵衛佐念^三見參シ給テ、先、「宗清ハ候歟」ト被尋申ケレバ、(頼盛)「痛ハル事候。罷下ラズ」ト宣ケレハ

(第五末―廿四)

頼朝と重衡、頼朝と頼盛の対話において、寛一本、延慶本では頼朝に尊敬・謙讓語が、重衡と頼盛に尊敬語のみが付されている。この場面で重衡は従三位、頼盛は正二位に対して、頼朝は正四位下であり、位の差からしても寛一本、延慶本の敬語表現のあり方は首肯できる。しかし、屋代本では両者対等に尊敬語が使われるのは注目に値する。

また、頼盛と対面後、維盛が入水した事を聞いた頼朝が、寛一本では「頼朝を流罪に申なだめられしは、ひとへに彼内府(重盛)の芳恩なり。其恩争かわするべきなれは」と維盛の父重盛の行為を「芳恩」とするのに対して、屋代本は「小松殿(重盛)こそ、我身一ノ大事ト思テシ給シカ。其奉公ヲ思ヘハ」と「奉公」としている。延慶本に同様の記事はないが、類似した表現が頼盛の関東下向(第五末―廿三)の場面であり、「故尼御前(池禅尼)ノ御恩ヲハ大納言殿(頼盛)ニ可奉報也」と「御恩」としており、屋代本のみ頼朝自らの発言でありながら、重盛より上位として振る舞っている。

(三) 小括

屋代本巻第十二では、頼朝が諸本よりも明確な理由をもって弟を誅殺し、朝廷より強い発言権を持ち、卑劣な行為をしない

人物として形成されている。頼朝を重視した叙述は微細ではあるが、他の巻の頼朝に対する敬語表現等においても見られる。屋代本巻第十二「宗盛清宗父子関東下向事」では宗盛との対話において、頼朝が平家の滅亡の理由を院宣ではなく、「サレ共悪行過法ニテ、天ノ責難遁ニヨテ」と「悪行」に関連して述べる。頼朝が平家の運命を悪行と結び付けて語るのは、原田氏の示す「悪行」観にも通ずる、頼朝を重視する叙述意識の一つといえよう。

三、屋代本本編における頼朝重視の編纂意識

――頼朝以外の主要人物

前章では頼朝に着目したが、次に頼朝以外の人物叙述から、頼朝の際立たせ方を確認する。

(一) 義経――傲慢な性格付け(巻第十二)

義経の性格付けについては諸氏の御指摘¹⁵⁾があるように、延慶本では傲慢さや非情さが描かれる部分もあるが、寛一本はそのような叙述が減少し、合戦譚での勇猛さや都落での同情的な筆致が目立つ。

対して、屋代本は既存の本文を用いながらも、悪意をもって義経を描く部分が見られる。巻第十二「為義頭討手土佐房昌俊上洛事」では、頼朝による義経追討の噂を聞いた人々が、義経の勲功に対して頼朝が下した処遇を不審がる。この叙述は屋代

本・覚一本・延慶本にもあるが、屋代本のみ章段の冒頭で、

「弓箭取身ノ、親ノ敵ヲ討ツル上ハ、何事カ是ニ過タル思
出有ヘキナレトモ、閑ヨリ東シハ源二位ノ御坐スレハ不及
申ニ。西国ハ義経カマ、トコソ思ツルニ、是コソ思外ノ事
ナレ」

と義経は自分が西国を治めると思っていたという著った発言
をする。類似した文言が延慶本にもあるが（第六末―四）、追討
以前の建礼門院の吉田人と平時忠配流の間にある源氏の勸賞記
事に置かれる。屋代本は義経の傲慢さが見られる台詞を追討記
事の冒頭に置くことで、義経を追討されるべき者として描き出
す意識があつたと考えられる。

このように義経をよい印象で描かないことは、巻第十二の冒
頭にもみえる。義経が宗盛父子を連れて関東に下向するものの
頼朝との対面が叶わない場面では、覚一本のように腰越状や義
経がいかに貢献してきたかを語る叙述が一切無い。また、延慶
本のように対面が叶うわけでもなく、「サコソ恨メシク被思ケ
ム」と端的に記し、義経の功績を示したり同情したりする叙述
はほとんど見られない。他の巻に諸本との目立つた相違は見受
けられず、義経が頼朝に敵対する存在として強く意識される巻
第十二において違いが顕著になる。よって、屋代本において義
経に同情的な叙述が少なく、驕った考えをもつ者として描き出
すことは、頼朝の義経に対する非情さを軽減させる意味を持つ
といえる。

(二) 文覚——独立性の減退（巻第五）

また、頼朝に敵対しない者でも、諸本に比して記事量が大幅
に少なくなっている人物に文覚がいる。文覚は頼朝に挙兵のた
めの院宣をもたらず重要人物であり、延慶本の構成をもとにす
ると、巻第五の文覚譚は大きく、①出家発心、②勸進帳・投獄、
③赦免後伊豆配流、④荒行、⑤依古、⑥荒波の鎮静、⑦頼朝と
の邂逅と院宣の入手、という流れになっている（諸本により配列
異同がある）。そのなかで屋代本は、①出家発心、④荒行、⑤依
古の記事が全くなく、⑥荒波を鎮める記事も簡略に記される。
①出家譚を詳述しないのは語り本系に共通しているが、④荒行、
⑤依古がないのは大きな特徴である。文覚に関する叙述が少な
く、④荒行が削除されることで、諸本よりも文覚を独立させて
語る部分が減り、相対的に頼朝が文覚により福原院宣を得る筋
が重視されていると考えられる。

(三) 平家一門——「抽書」も含めた称賛記事の欠如

このような意識は平家一門についてはかなり大きい。清盛が
権威を与えられる場面を強調しないことは、巻第一「平家一門
繁昌事」（「鱸」〈覚〉）に見られる。本章段は清盛の栄進を語り、
屋代本と覚一本はほぼ同質の本文をもつ。目立つ異同は、忠盛
の通う女房の詠んだ歌の後に「とよみたりければ、いとゝあさ
からずぞおもはれる。薩摩守忠教の母是なり」という文が覚
一本にのみある程度である。

そのなかに覺一本には章段名にもなっている鱸説話がある。これは、「平家かやうに繁昌せられけるも、熊野権現の御利生とぞきこえし」〈覺〉とあるように、平家が隆盛する理由を熊野の利生に求める佳話であり、清盛が熊野へ向かう船中に鱸が躍り入ってくる吉事が起こり、それを家子や侍達に食べさせたと言ふ。覺一本では「精進潔斎の道なれども」と非難めいた言葉はあるが、「其故にや、吉事のみうちつゞいて、太政大臣まできはめ給へり。子孫の官途も、竜の雲に昇るよりは猶すみやか也。九代の先蹤をこえ給ふこそ目出けれ」と締めくくる。この説話は平家の榮華を示すためのものと考えて差し支えないだろう。しかし、延慶本や長門本にもある記事が屋代本にはまったくなく、熊野権現による平家一門の榮華が示されていないのである。⁽¹⁶⁾

榮華・稱賛記事の欠如は、屋代本別冊「拙書」にも関連すると思われる。「拙書」七力条の目録は、

- 一 義王義女仏閉事 同出家事 (祇王)
 - 一 入道相国為慈恵大僧正化身事 (慈心坊)
 - 一 流砂葱嶺事 并同宗論幸事 (流砂葱嶺・宗論延など)
 - 一 皇后宮亮經正竹生島參詣事 (竹生島詣)
 - 一 本三位中将重衡狩野介預事 付千手前事 (千手前)
 - 一 新院嚴島御幸事 同御願文事 (富士川)
 - 一 将門序 (延喜聖代(延など))
- となっている(括弧で対応する覺一本等の章段名を付した)。全体

として仏教色の強い説話が多い印象を受けるが、松尾氏、原田氏の指摘する屋代本編の仏教色の薄さとかかわるかどうかは今後検討したい。このなかで、清盛が慈恵大僧正の再誕であるとする「慈心坊」(巻第六、經正が竹生島に詣でて奇瑞を得る「竹生島詣」(巻第七、重衡と千手前のやりとりから重衡の優美さを語る「千手前」(巻第十)といった平家一門の佳話が抄出されていることが分かる。また、「流砂葱嶺」は大江匡房が天竺よりも高野詣を推奨し、弘法大師の靈驗を語る説話だが、末尾には「白河院、加様二高野ヲ執シ思召レタリシカハ、其御子ニテ清盛モ、高野大塔ヲ修理セラレケルニヤ」と清盛の功德に言及し、清盛を称賛する意識が見られる。

その観点から「祇王」を確認すると、少し違った印象が見える。「祇王」では、諸本共通して清盛の暴挙を非難する意味合いが含まれているといえる。確かに、「拙書」でも諸本同様に仏御前に執心して、「義王力在ルヲ憚ハ、義王ヲコソ出サメ」と祇王を追放し、再び呼び戻したときも「サラハ疾々罷歸レ。此後ハ不召共常ニ參テ、今様ウタヒ舞ナトモ舞テ、仏慰メヨ」と祇王に心ない言葉を投げかけるという清盛の心象を悪くする記述がみられ、全体としても特別独自の詞章はない。しかし、結末の独自文では、仏御前が出家したと聞いた清盛が、「左様ニ思立テ浮世ヲ厭ハン者ヲ、中々兎角云ニ不及」トテ、其後ハ尋モ無リケリ」という状態になる。覺一本などにはない表現だが、延慶本では、「後ニハカクト聞給ケレトモ出家シテケレハ

不力及。サテヤミ給キ」となっている。延慶本では、出家してしまつたために如何ともし難く諦める意味合いが強いが、屋代本は出家した者への配慮が読み取れる。一見、清盛を非難する説話でありながら完全に批難する形で終わらせない独自文をもっていることは指摘しておくべきだろう。

このように、「抽書」の七力条中四力条に平家の佳話としての意識があり、「祇王」も少なからず清盛への意識が読みとれる。主要な平家称賛記事を抄出、省略しており、屋代本本編には平家の称賛を意識した記事が諸本と比べてかなり少なく、頼朝への傾倒が見て取れる。なお、「抽書」について考察するべき多くの観点は今後の課題とし、今回は「抽書」の記事は抄出した形で収めることで、屋代本本編がよりいっそう頼朝の台頭を示すことになるという点をおさえておく。

四、屋代本の節刀継承記事の意味

以上、頼朝に着目して記事内容の独自性等々を確認してきたが、他の特異な記事として、「節刀」に関する記事群（巻第三「清盛高野大塔修理事并嚴島利生事」・巻第五「福原怪異事」）に触れておきたい。節刀は征夷大將軍の証として朝廷から与えられるものであり、今井正之助氏が『平家物語』では、

①巻第二「教訓状」で鹿谷の陰謀に憤慨して武装した清盛が持つ、嚴島明神に下賜された「手鉾」〈延〉、「小長刀」

〈寛〉

- ②巻第三「大塔建立」で清盛が嚴島の修造後に見た夢で、嚴島明神から下賜される「小長刀」〈延、寛、節度〉〈延〉
③巻第五「物怪之沙汰」の青侍が見た夢で、嚴島明神、八幡大菩薩、春日大明神の対話により、清盛から頼朝、藤原將軍へと継承していくと決められた「御劍」〈延〉、〈節斗〉〈寛〉

の三つが文脈及び語義上同一のものと指摘する。これにより、延慶本や寛一本等で節刀の継承による源平交替の意識が組み込まれていることは諸氏の指摘するとおりである。しかし、屋代本では②の夢記事がなく、③では藤原將軍への継承が明記されない（四部本は②のみ欠如）。前者は他本の増補説と屋代本・四部本等の削除説とに見解が分かれている。後者に関しては、古態説や「治承四年当時の予言としては不自然と考えて省略した」（平田俊春¹⁸）という見解もある。しかし、屋代本の先行研究及び本稿における頼朝重視という点を考えると、節刀が清盛に与えられることを大々的に描かないこと、藤原將軍への継承を記さないことは、頼朝が「節刀」を与えられる正統な人物であることを示すために意図的に省略したと考えられないだろうか。

「大塔建立」は、清盛が老翁に嚴島を修理すれば栄進できると言われて修造した嚴島神社に通夜すると、夢で嚴島明神の使いから小長刀を下賜され、託宣で悪行があれば栄華は子孫まで続かないと告げられるという筋である。寛一本、屋代本は夢記

事を除いて大概が一致している。まずは諸本の冒頭と末尾に着目したい。

〈屋〉大政入道加様ニサカへ給へルハ、一向嚴島ノ大明神ノ御計ヒトソ覺タル。……不思議ナシ事共ナリ。⁽¹⁹⁾

〈覺〉抑平家、安芸の嚴島を信じ始られける事は、いかにといふに、……目出たかりし事共也。

〈延〉入道殊ニ嚴嶋ヲ崇給ケル由來ハ、……嚴嶋御幸遂サセヲハシマスベシト聞ケリ。

〈四〉平家嚴島被信……其故成太政大臣之覺。

〈長〉平家いつくしまを信じ給ひける事は、……それよりしてそ、平家いよくいつくしまの大明神をは、ことに崇敬し給ひける。

覺一本・延慶本・四部本・長門本の冒頭は、平家が嚴島を信仰する理由は、とほぼ同様の表現で語り始める。結末はそれぞれ異なるが、「目出たかりし」〈覺〉、「其の故にや、太政大臣までも成りたまひけん」〈四〉、「ことに崇敬し給ひける」〈長〉と、おおよそよい印象で締めくくっているといえる。⁽²⁰⁾ 対して、屋代本のみ清盛が栄えた理由は、と語り始めて一連の出来事を「不思議」と結ぶ。「不思議」という語は様々な意味で使われる。だが、直前の中宮徳子の御産記事において、「今度ノ御産ニ不思議アマタ有ケリ」〈屋〉と御産の目出度さに不相応なものを列挙し、今後起きる平家の滅亡を讀者（聞き手）に想起させることを踏まえると、屋代本は「大塔建立」を清盛の佳話として

語る意識はない。

次の巻第五「物怪之沙汰」では、福原遷都の後に不穏な怪異が度々起きるなかで、雅頼に仕える青侍が見る夢に八幡大菩薩、春日大明神、嚴島明神が現れ、清盛が持つ節刀を頼朝に移譲する話し合いがなされる。屋代本では、節刀の継承者として藤原將軍に言及しないことが古態性を示すとして、早くから取り上げられてきた。確かに屋代本では、青侍は夢の中で上臈達が会話する様子をただ傍観するのみであり、夢を伝え聞いた宰相入道（成頼）により登場した者達の正体が明かされる。対して覺一本、延慶本、四部本、長門本では夢の中の対話で神仏の名が明かされ、屋代本よりも分かりやすい構成となっている。簡略なために古態と判断するつもりはないが、分かり易く改変していったと考えるのが妥当ではないか。決定的根拠とは言いが、屋代本は古態性をもつ記事を取り込んだ、もしくは残していると考えられる。

勿論、その部分だけで古態か否かを論じることには意味はなく、本論の意図するところではない。しかし、後世の『保暦間記』や『増鏡』に藤原將軍を含む予兆夢が取り入れられていること、覺一本でも分かりやすくなるための改変が行われていることから、この夢がいかに関心を持つて扱われていたのかを推察できる。その中で屋代本が諸本と異なり藤原將軍を明示しないことには、古態か否か、整合性があるか否かという問題を超えた別の意識があると考えられる。それが節刀の継承という、源氏の

正統性の意識ではないか。藤原将軍へ節刀を与える記事を含まないということは、見方を変えれば源氏が節刀を持ち続けているともとれる。「教訓状」、「物怪之沙汰」を見るかぎり、清盛が節刀を与えられなかったわけではない。しかし、それを大々的に記さず、藤原将軍を明示しないことは、前章で確認した平家称賛の意識が低く、頼朝の称揚が見られることとかわるのではないだろうか。

五、現存屋代本が書写された時代性

屋代本本編は諸本と異なる配列や叙述から、頼朝を直接的に好印象に仕立てる一方で、義経や文覚といった頼朝に関わる独立性の高い人物の記事が省略されたり、改変されたりすることでも間接的に頼朝が重視されているといえる。また、それは平家に関して顕著であり、平家の栄華を語る意識が極端に低く、節刀についても、同様の意識が明確にみられるといえる。

屋代本本編の簡略性について、麻原美子氏は十四世紀中葉に『源氏物語』の抄出性を持つ作品が成立していることから、簡便性を求める時代的要求があり、屋代本は論旨明快で共感性を増す表現に置き換えた歴史物語の創造を目指したとみる。また、兵藤裕己氏は「語り」という観点から、「原屋代本」は平家全巻もしくは任意の一卷の通し語りの叙事的な演唱ヴァージョンとして成立したと指摘する。後述するように両氏の見解に完全

に賛同するわけではないが、一まとめとしての簡明な歴史物語の性格を持つとは考えられる。だが、本稿では簡明だけでなく頼朝に偏重した記述がみられることを示した。このような性格を持つ屋代本本編が「拙書」、そして源氏重代の太刀を宝剣と重ね合わせて語る「剣巻」を併せ持った形で十六世紀中後期に書写されたであろうことにはどのような意味があるのか。

書誌学的観点から推察すると佐々木浩孝氏⁽²³⁾によれば現存屋代本は縦三一糎、横二〇・五糎で、軍記物語の写本としては他に類を見ず、製作者が所蔵者の権威を示していた可能性があり、装訂は中世以降では寺院圈に限られる粘葉装である。漢字片仮名交じり表記という点も踏まえ、氏は僧侶や寺院の関与を想定する。また十五世紀において、飛鳥井家当主や中央公家から武士に与えられた書物が、見た目は良いが誤脱が平気にあるという見解も示す⁽²⁴⁾。寸法、装訂についての見解は疑問が残るが、現存屋代本が十六世紀中々後期の書写と考えられること、持ち運びにくい大きさであること、漢籍の引用などに誤脱が見られることから、語りのためではなく武士が権威づけとして与えられた書写本の可能性が考えられるのではないか。このような推測を立てたうえで、室町後期において、源氏を重視した『平家物語』が生成される時代性を考えてみたい。

(一)鎌倉末期～室町初期

前提となる鎌倉末期から室町初期にかけての動きをおさえ

る。川合康氏⁽²⁷⁾は、蒙古襲来を受けた後の鎌倉幕府では、文永七年（一二七〇）には七代將軍惟康王が源姓となったり、弘安九年（一二八六）には安達泰盛が「劍卷」にも見られる源氏重代の太刀鬚切を入手したりと、源氏將軍観が高揚したとする。この意識が足利將軍の源氏嫡流工作にもつながり、尊氏・義詮の葬送時は多田院に分骨されるなど、摂津・河内・大和源氏など様々な源氏を包括する意識が見られるとする。また、市澤哲氏⁽²⁸⁾は足利將軍が他の有力大名との差別化を図るためにも、北朝天皇と密接にかかわっていたことを指摘する。

この時期は足利將軍の正統性を示すための源氏称揚作品が多く生まれ、史書では『梅松論』⁽²⁹⁾、『源威集』の成立が挙げられる。『梅松論』は小秋元段氏によれば観応二年（一二五一）頃の成立と考えられており、早くから尊氏の威徳を賞賛する内容であることが指摘され、その後作と考えられる『源威集』も頼義・義家・頼朝などの先例に準えて足利將軍を語る。また、同様の意識は絵巻の制作からいへ、高岸輝氏⁽³⁰⁾は伏見宮貞成親王の『看聞日記』に記される「室町殿御絵」とされる足利將軍家の絵巻コレクションの中に、「平家絵」、「貞任宗任討伐絵」などが収められていることを指摘する。そのなかでも尊氏が注文したと考えられる「泰衡征伐絵」十巻は頼朝による奥州藤原氏の泰衡の征伐を描いたもので、『看聞日記』で絶賛される。前九年合戦を描いた「貞任宗任討伐絵」と併せて考えると、これらの絵巻の作成は源氏將軍の正統に連なることを宣言する絵巻であっ

たと氏は指摘する。また、兵藤氏⁽³²⁾は永徳三年（一二八三）正月の除目で源氏長者と両院別当職が村上源氏中院流から清和源氏足利流の義満に移行したことから、当道座の管理権が清和源氏である足利家に移行したことを述べ、進上された覚一検校伝授の正本が、少なくとも義政の頃までは保管されていたことを示す。兵藤氏の見解については市澤氏の批判があるが、いずれにしても足利氏は自らの正統性を頼朝に限らず頼義や義家によって示していたといえる。

しかし、『梅松論』、『源威集』で頼朝は手放しで称賛されることはなく、『梅松論』では、「罰の苛故に仁の關るかとみえ、今の征夷大將軍尊氏は仁徳をかね給へるうへに、なを大なる徳在なり」（延宝本）などと、尊氏を賞賛するために難点が挙げられる。このように、完全なる頼朝礼賛でないことは制度改革にもいえる。石原比伊呂氏⁽³⁴⁾は二代將軍義詮の頃には、源氏將軍や北条得宗家の先例が意識されながらも、尊氏のように中納言を経ずに大納言昇進を果たしたり、寺号を含む位牌にこだわったりと、「足利家」固有の枠組みを模索していたとする。以上から、室町初期は足利將軍家が自身の地位を確立していく段階にあり、史書や絵巻を通じて頼朝やそれ以前の頼義・義家の明確で華々しい活躍のあつた奥州征討に主眼を置いて正統性を示しながらも、それを超越していく形で制度や作品が生み出され、継承されていったと考えられる。

(二)室町中々後期

しかしながら、兵藤氏が応仁の乱を境に將軍の權威が弱体化し、文化的支配も退廃していくと述べるように、足利將軍家による源氏の正統性を説いた文化的活動は次第に見られなくなる。山田康弘氏は室町期の征夷大將軍について、応仁以前からその重要性が低下しており、五代目將軍義教は任官以前から執政したり、天下の人々の支持を得ているか否かを重視したり『建内記』正長元年正月十九日条と、征夷大將軍という權威をもたずとも執政ができた一方で、足利本家のみが「天下を判斷する」『建内記』正長元年五月十四日条のために、戦国末まで征夷大將軍を求め続けたと指摘する。しかし、明応二年(四九三)に將軍が義植、義澄系統に分裂した後、義晴が征夷大將軍であるのに対し、もう一方の義維も「室町殿」など、ほぼ同様に京都の寺社本所から呼ばれており、征夷大將軍の絶対性が社会に必ずしも十分に浸透していなかったことも述べる。高岸氏は永正十七年(一五二〇)頃に大内義興・細川高国の軍事力によって政治的な安定がもたらされて絵巻が隆盛し、公卿三条西実隆らと絵師土佐光信・光茂父子のもので、坂上田村麻呂の蝦夷討伐が中心的なエピソードとなる「清水寺縁起絵巻」が完成していることを紹介している。坂上田村麻呂と義植とが重ね合わせられ、清水寺の靈力と征夷大將軍の武力による守護を示そうとしたと推察する。義植と結びつけようとしたのかについては検討の余地があるが、少なくとも源氏將軍を意識した足利

將軍の權威付けは行われていないと考えられる。

だが、源氏嫡流という正統性の權威づけの形式が失われたとは考えにくい。十六世紀末には徳川家康が足利將軍に代わる存在として、十七世紀には島津氏が日向国支配の正統性を示す一環として、藤原から清和源氏へと改姓する。後者について鈴木彰氏は、島津家が歴代の家督が相伝した品々に「劍巻」に見られる膝丸をはじめ、『平家物語』や『太平記』の伝本や頼朝ゆかりの品々が多く含まれ、幕末には『鬚切由来記』に鬚切が相承院から島津家に進上されて太刀が揃ったと記していることを指摘する。

なお、氏は十六世紀中頃には島津氏が清和源氏であることは、まだ周知され強固な力をもっていたとは考えられないとする。以上を踏まえると、現存屋代本も同様に、他に清和源氏の流れを汲む人々などが源氏の流れを意識して書写、保管した可能性はあるのではないか。戦国期の『平家物語』や『太平記』の受容では、毛利氏が琵琶法師を抱えていたことや上井覚兼(島津義久の老中)が両作品を愛読していたこと、北条早雲が『太平記』の善本を所持していたことなどを小和田哲男氏が指摘している。よって、現存屋代本では、当時の清和源氏を中心とした戦国大名らの動向、権力の在り方、先祖や血脈に対する意識、文化基盤、家督の所有した品々などとの関係性を踏まえて考察することも可能ではないか。清和源氏は多くの傍流を生み、室町中後期には地方で様々な活躍を見せている。今回は可能性の

一例として、武田氏の実態を挙げて、今後の指針とする。

甲斐武田氏について丸島和洋氏は十六世紀には信濃を中心に権力を拡大し、足利將軍義輝による武田・長尾氏間の和睦調停に応じないなど、幕府に対する独自の軍事行動をとるようになることを指摘する。また武田信玄は信濃守であったが、それを周知する意識はなく「領国支配は、前代からの正統性継受よりは、再編・再構築という側面を重視した」と述べる。

武田氏は清和源氏の義光流であるが、それを意識していたのか。天文二十二年（一五五三）の「長禪寺殿画像銘」（『戦国遺文 武田氏編』三七四号）では「新羅後裔信康公、自描慈母之容顔」、また、元龜三年（一五七〇）の「武田信玄条目」（同一九二二号）では、「当祖先祖新羅三郎義光已来、園城寺^江由緒之事」といった文書が見られる。同様の表現が多く見られるわけではなく、これらをもつて正統性を示したとは断定できないが、義光を先祖として意識しているとはいえる。

また、若狭武田氏は武家の有職故実に通じ、源氏の血脈の意識があったこと、飛鳥井家と交渉があったことを米原正義氏⁽⁴¹⁾が指摘している。有職故実の収集という観点では、同時代に細川幽斉や一色直朝も存在しており、あらゆる角度から政治的・文化的活動を見ていく必要があるだろう。

現存屋代本に見られる頼朝の重視と、武田氏に限らない戦国大名の源氏に対する認識とのかかわりという論旨の重要な部分がいまだ不十分であり、今後さらなる調査が必要である。書物

の形態や当時の状況からすると、現存屋代本は少なくとも「語り」における平家の鎮魂とは著しく異なる目的で編纂されていると考えられ、足利將軍家の威光を賞賛するよりも、島津氏のように清和源氏に連なる他の氏族もしくは、それにかかわる者が権威を示すために書写し、保管していた可能性があるのではないか。

六、おわりに―「抽書」、「剣巻」との関連性

以上、内容が多岐にわたり煩雑とした論であったが、大筋として、屋代本本編は頼朝を重視した編纂意識が見られることを示した。また、いまだ明確な見解を示せてはいないが、戦国大名などの権威を示すために書写、保管された可能性を示した。

内容が煩雑になるために避けたが、「抽書」、「剣巻」についても多分に論じる余地がある。「抽書」は本編と異なり傍系ともいえる平家一門の称賛記事を多く含み、仏教色の強い説話を多く含むという特徴を持つ。先行研究では、抄出元が屋代本本編が既存の本かと意見が分かれ、「秘事」との関連性が指摘されてきたが、説話を「条」と数えることなど疑問の余地は多く⁽⁴²⁾、平曲という枠組みだけではなく、十五世紀以降も多く見られる抄出性をもつ諸作品の抜書との関連性を考える必要があるだろう。長坂成行氏⁽⁴³⁾がまとめられた『太平記』抜書との共通性は今のところ見られなかったが、『古事談抜書』（松平文庫蔵

本)との関連性は気にかかる。池上洵一氏は、『古事談抜書』は『古事談』の表現や文体を大幅に改変したり、大量の独自説話を加えたりしていることを指摘する。この点は諸本と著しい差異のない記事が多い「抽書」とは異なるが、尾題に「抽書」と記すことや説話を「条」と数えること、仏教説話を中心に抜き出しているという共通性は気にかかる。抜書の書式と所蔵場所との関連性も考え得る可能性がある。また、もう一つの屋代本別冊「剣巻」は、朱筆が見られないことや、内容や表現などから、「抽書」よりも後代に付されたと考えられる。「剣巻」は中世日本紀や御伽草子や謡曲、刀剣への関心などの関わりも指摘されており、社会や文化、諸作品との関わりを多角的に検証していく必要がある。今後、鎌倉時代後半から室町時代にかけて、源氏の正統性や嫡流について諸家がどのように意識していたのかなどを探り、「抽書」、「剣巻」についても考察を重ね、冒頭に掲げたように現存屋代本の位置付けを探っていく。

《使用テキスト一覧》

引用時に分かりにくい場合は、適宜◇で諸本の初めの文字を示した(例…「……」〈屋〉)。

・屋代本Ⅱ麻原美子他編『屋代本高野本対照平家物語』

(新典社 一九九〇年五月—一九九三年六月)

・覚一本Ⅱ同右

・延慶本Ⅱ北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇』

(勉誠出版 一九九〇年六月)
 ・長門本Ⅱ麻原美子他編『長門本平家物語』
 (勉誠出版 二〇〇五年十月—二〇〇六年六月)
 ・四部本Ⅱ慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『四部合戦状本平家物語』
 (汲古書院 一九六七年三月)

注

(1) 外題や尾題では「抜書」、目録のみ「抽書」と表記される。十四世紀から十八世紀頃までに成立したとされる諸作品の抄出書の題は様々だが、「抽書」という表記は管見の限り『古事談抜書』(松平文庫蔵本)の尾題を除いて見られない。諸作品の「抜書」との違いを明確にするためにも、便宜上屋代本別冊を「抽書」と表記する。

(2) 『屋代本『平家物語』の成立』(山下宏明編『軍記文学研究叢書 五 平家物語の生成』(汲古書院 一九九七年六月))

(3) 『平家物語屋代本とその周辺』(おうふう 二〇一三年二月)

(4) 『平家物語異本の研究(一)』(『日本文学研究資料叢書 平家物語』(有精堂 一九六九年))

(5) 『屋代本平家物語の語法覚書 書写年代推定の試み』(石川透他編『徳江元正退職記念 鎌倉室町文学論纂』(三弥井書店 二〇〇二年五月))

(6) 前掲(2)

(7) 佐々木孝浩『屋代本平家物語』の書誌学的再検討』(千明守編『平

家物語の多角的研究―屋代本を拠点として―(ひつじ書房 二〇一一年十一月)

- (8) 以下、章段内容の理解のしやすさを重視して、適宜覚一本の章段名を用いる。

- (9) 『軍記物語原論』(笠間書院 二〇〇八年八月)

- (10) 『中世文学研究叢書一 軍記物語論究』(若草書房 一九九六年六月)

- (11) 『平家物語の文学史』(東京大学出版会 二〇一二年十二月)

- (12) 前掲(11)

- (13) 延慶本等では、景清は降人となって八田四郎知家に預けられた後に出家し、東大寺供養に先立って断食をして干死するが、屋代本では「鎌倉ニテ捕レテ、宇都宮ニ預ラル」とだけ記す違いがみられる。

- (14) この場面で頼朝を「日本ノ大将」に補せられたとする叙述は、覚一本や延慶本には見られない。「日本の大將軍」という表現は、元暦元年(一一八四)の「香取源太祝家文書」(『平安遺文』九四号)では、「日本大將軍家鎌倉家」など、当時から見られるが、この場面で頼朝が「日本ノ大将」となったとすることは不自然である。樋口大祐氏は「太平記なるもの―前太平記と太平記」(市澤哲編『太平記を読む』(吉川弘文館 二〇〇八年十一月)で「前太平記」(十七世紀末以前に成立)に源経基を「日本の大將軍」とする記述があることを指摘する。このような表現から、屋代本の後代性や手を加えられた可能性が考えられるのではないだ

ろうか。

- (15) 鈴木彰『「平家物語」にみる〈義経〉像のゆらぎ―人と事件と歴史の創造―』(『軍記と語り物』四十二号 二〇〇六年三月)、元木泰雄「延慶本『平家物語』にみる源義経」(佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述』(竹林舎 二〇一一年四月))など。

- (16) 「鱈」は四部本にもない。屋代本と四部本との親近性は、本文流動の観点から原田氏(前掲(11))や多田圭子氏(『中世軍記物語における刀剣説話について』(『国文目白』二十八号 一九八八年十一月))が指摘するが、同様に気にかかる部分ではある。

- (17) 「大塔建立」と「頼豪」―延慶本平家物語の古態性の検証―(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』二十九号 一九八〇年三月)
- (18) 『平家物語の批判的研究 上巻』(『国書刊行会』一九九〇年六月)
- (19) 書入れないが、文脈上、「不思議ナリシ事」の誤脱だと考えられる。

- (20) なお、延慶本は末尾で厳島御幸に言及するように、諸本と異なり高倉院の厳島御幸(巻第二中)に付随して「大塔建立」が語られる。また、長門本は中途に弘法大師が清盛の栄華を「それも一期そよ」と告げたことに対して、「弘法の御つけとおぼえて身のけよたちておぼえけり」とあり、覚一本・四部本と同一の意識とは見なしがたい。

- (21) 前掲(2)

- (22) 『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館 二〇〇〇年一月)

- (23) 前掲(7)

(24) 新田一郎・佐々木孝浩・小川豊生・前田雅之『座談会』十五世紀の文学』(『文学』九卷三号 二〇〇八年五月)

(25) 寸法について、高野本(東京大学文学部国語学研究室蔵)は縦三一・〇糎、横二三・二糎であり、後述する『太平記』の島津家本も縦三一・五糎、横二二・二糎などがある。また、粘葉装は当時主たる装訂の一つであり、寺院圈との直接的な関係が言えるのか否かは疑問の余地がある。

(26) 松尾葦江氏(前掲(10))は『葵前』や『聖主臨幸』の漢籍に関する誤った記述から、編者は漢籍の原拠に忠実ではなく、知識人的教養が正確でないと指摘する。

(27) 『鎌倉幕府成立氏の研究』(校倉書房 二〇〇四年十月)

(28) 『日本中世公家政治史の研究』(校倉書房 二〇一一年九月)

(29) 『太平記・梅松論の研究』(汲古書院 二〇〇五年十二月)

(30) 矢代和夫・加美宏『梅松論』(現代思潮社 一九七五年八月)

(31) 『室町絵巻の魔力―再生と創造の中世』(吉川弘文館 二〇〇八年九月)

(32) 前掲(22)

(33) 市澤氏(前掲(28))は源氏長者が足利家、久我家間を動いていること、座中自らの手で管理されていたと考えられること、失敗するが久我家の介入が試みられていたことなどを挙げる。

(34) 『義詮期における足利將軍家の変質』(鎌倉遺文研究』二十九号 二〇一二年四月)

(35) 『戦国時代の足利將軍』(吉川弘文館 二〇一一年七月)

(36) 徳川家康の改姓の時期、目的については戦前から考察が行われているが、近年では笠谷和比古『徳川家康の源氏改姓問題』(『国際日本文化研究センター紀要』十六号 一九九七年三月)がある。

(37) 「再編される十六世紀の戦場体験―島津氏由緒との関わりから」(『文学』十三巻五号 二〇一二年九月)

(38) 長坂成行氏は『伝存太平記書写総覧』(和泉書院 二〇〇八年九月)で、島津家本を縦三一・五糎、横二二・二糎とし、現存屋代本に近い大きさをもっていることが分かる。このことから、現存屋代本による権威の主張が読み取れると考えられる。

(39) 『戦国大名と読書』(柏書房 二〇一四年二月)

(40) 『戦国大名武田氏の権力構造』(思文閣 二〇一一年二月)

(41) 『戦国武士と文芸の研究』(桜楓社 一九七六年十月)

(42) 兵藤氏(前掲(22))は中世の享受記録では座頭の語りを「句」と表記していることを示している。

(43) 前掲(38)

(44) 『島原松平文庫蔵古事談抜書の研究』(和泉書院 一九八八年十二月)

(45) 出典・典拠論では伊藤正義氏(『熱田の深秘―中世日本私注』(『人文研究』三十一号 一九八〇年三月))が中世日本紀とのかわりを示す。また、編纂意図については、松尾葦江氏(『剣巻』の意味するもの)、『日本古典文学会々報』一一二号 一九八七年七月)が灌頂卷の性格、多田圭子氏(前掲(16))、川合康氏(『剣巻』をどうとらえるか―その歴史叙述方法への考察を中心

に「千明守編『平家物語の多角的研究―屋代本を拠点として―』（ひつじ書房 二〇二一年十一月）が源氏の正統性の主張、鶴巻由美氏（「剣巻」の構想と三種神器譚）（『國學院大学大学院紀要（文学研究科）』二十五号 一九九四年二月）、渡瀬淳子氏（「剣巻」の「創作」態度―宇治の橘姫をめぐる―）（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』五十四号 二〇〇六年二月）が知識欲からくる創作や新たな解釈ということを指摘する。また、鈴木彰氏（『平家物語の展開と中世社会』（汲古書院 二〇〇六年二月）は刀剣への関心との関連性を示す。

（なかぎりゆかり／本学大学院博士前期課程）